

JICA ボランティア 千葉

SV ニュース
第7号

平成十九年度通常総会開催

五月二十六日(日) 午前九時三十分より正午まで、千葉市国際交流プラザにおいて開催されました。出席は会員二十七名、来賓として、JICA青年海外協力隊 事務局長 大塚正明氏、千葉県総合企画部政策推進室 国際政策グループ 加瀬文彦氏、JICA千葉県国際協力推進員 木野本まゆみ氏、および青年海外協力隊千葉OB会会長 吉田憲司氏の四名が臨席されました。



来賓 加瀬文彦氏(左) 大塚正明氏(右)

議事として平成十八年度活動報告、会計報告、会計監査報告、平成十九年度活動計画案、平成十九年度予算案、規約改正案、役員候補者案の審



会場風景

議が行われました。規約改正については活発な議論がありましたが、全議案とも原案どおり可決されました。

報告事項として山本茂穂幹事によるホームページ経営経過、増田定雄幹事による国際理解(開発)教育の活動の説明がありました。次いで上田事務局長より新会員と今春帰国者の紹介があり、後藤敏行氏が自己紹介されました。司会および開会宣言は黒田副会長、議事の議長を品川会長、議案説明は担当役員、閉会宣言を梅谷副会長が行いました。書記には、津田正臣会員と横田勝徳会員があたりました。引き続き懇親会が行われ盛会でした。

第五回定例会開催のお知らせ
日時 十二月八日(土)
午後一時〜三時
引続き懇親会を予定
会場 千葉市国際交流プラザ



司会中の黒田副会長



「品川会長の活動方針説明」

四年前の発足の時の会員数約三十人が、現在は八十人となりました。その間、いろいろな対外活動を行い、会報、ホームページも充実しつつあります。シニアボランティアは帰国後が本番で、会が会員に何を求めるかではなく、会員が会に何が出来ることが大切なことだと考えております。これまで積み上げられた業績を更に活動の幅を広げ、深化するため関連機関との連携を強化し、又千葉市支部を立ち上げ地域とのより密接な連携をはかる所存です。



ちば国際コンベンションビューローの推進

コンベンションと国際交流は、海外からの参加を含むコンベンションは日本と外国の参加者が、一定の目的を持ってフェイイス・ツー・フェイスで集合、交流する場であって、まさに国際交流の場そのものと言えます。

特別寄稿

千葉県の国際交流、国際協力事業

(財)ちば国際コンベンションビューロー
専務理事 鈴木 正一

一方、国際交流部門から見ると日本人(千葉県民)と外国人との交流事業になる訳です。この十数年で定住外国人が増大しました。日本全体では二百万人、千葉県には十万人を越す外国人の方が居住しています。滞在目的は仕事、勉強など様々ですが、日本での居住には色々な苦労があると思います。千葉県国際交流センターでは、居住に伴う問題の解決が、「多文化共生」社会を実現していくという理解の下に外国人に対して色々な活動をしていきます。日本語ボランティアの普及、法律相談、テレフォン相談などの事業、子供たちのための夏休み特別イベントプログラム

などです。千葉県における国際協力の分野は、従来から民間の団体やNPO法人などが活動していましたが、JICAは二〇〇三年に独立行政法人化され、地域との連携強化方針の下に千葉県国際交流センターに国際協力推進員のデスクを構えるようになりました。国際協力の理解、啓蒙運動を千葉県全体に広めていく活動が大変活発になりました。例えば国際協力や異文化を理解のため学校や企業に講師を派遣する「出前講座」もここ数年で大きく伸び、昨年は四十二名の講師派遣で四千五百二十一人を対象に講座を実施しました。この講師派遣にはJICAシニアボランティアにも協力を戴いています。千葉県で進んでいる「地域からの国際協力」として、ベトナムとの環境問題や教育問題に関する交流も、国際協力推進員のコーディネートにより千葉大学等との連携を推進する形で進め効果を挙げられています。又、去る八月二十六日にはJICA、ユニセフ千葉支部、千葉県、当財団の四者が千葉大学やき会館で「グローバルフェスタ Chiba」を開催し、千葉県シニアボランティアの会をはじめ国際協力に関心のある多くの団体が参加されました。これからも、千葉県における国際協力の活動を一層活発にしたいと、関係者各位との連携を深めて行きたいと考えております。

来 賓 接 拶

JICAボランティア事業
の近況青年海外協力協会
事務局長 大塚正明

今日は平成十九年度通常総会にお招きいただきありがとうございます。また日頃よりJICAボランティア事業にご支援、ご協力をいただいておりますことに對しまして、深く感謝申し上げます。

JICAボランティア事業の最近の状況についてご紹介させていただきます。まず、青年海外協力隊は昭和四十年の発足以来四十二年目となっておりますが、平成十九年度一次隊の七月上旬の出発をもって、派遣隊員数が三万人を突破いたします。最近では年間に約千二百名を新規に派遣しており、六月三十日現在、七十八カ国で二千七百五十二名が活動中です。

シニア海外ボランティアに關しましては、平成二年の発足以来、これまでに三千名を超える方々を派遣してまいりました。年間に約四百名を派遣、現在、五十四カ国に六百

四十一名を派遣中です。人数実績だけではなく、ボランティアとして派遣された方々の活躍振りからも、JICAボランティア事業は国民参加型事業の重要な位置を占め、特に草の根レベルの活動を通じて、開発途上国の経済や社会の発展に寄与する事業として大きな期待が寄せられております。

昨今、ODA予算は大変厳しい状況にあります。特に、シニア海外ボランティアに關しましては、政府の掲げる「再チャレンジ支援総合プラン」の中、「シニア層に対する国際協力の中で活躍できる機会の提供」ということで、今年度は百二十名の派遣増の予算が認められました。JICAといたしましては、シニア層の方々への一層の広報強化、要請開拓や応募促進に取り組んでいるところで

平成十九年度からの新しい取り組みといたしまして、十月に開始される一九年度三次隊の訓練からこれまで別々に行われてきた青年海外協力隊とシニア海外ボランティアの方々の訓練が合同化されます。シニア海外ボランティアの派遣前研修はこれまで、東京で三十五日間としておりましたが、今後は長野県駒ヶ根と福島県二本松の訓練所で、特に語学講座の時間数、内容

ともに充実させ、青年海外協力隊と六十五日間の合同合宿訓練を行うこととなっています。青年とシニアの合同訓練ならではのメリットが生み出せるよう工夫をしていきたいと考えております。

さて、平成二十年度には、これまでのボランティア事業を含む技術協力事業に加え、無償資金協力事業及び円借款事業を含めた一元的な総合的援助機関としての「新JICA」発足が予定されており、現在、様々な準備を進めているところであります。ボランティア事業につきましては、開発途上国の草の根の人々のニーズに應える事業であるという点、そして、日本国内では広く国民との接点を持つ事業である点をしっかりと確認しつつ、より幅広く、そして戦略的に事業を展開してゆく所存です。

千葉の国際協力モデル事業

千葉県総合企画部政策推進室
国際政策グループ
副主幹 加瀬文彦

平素から本県の国際化施策の推進に力をおかけいただき、心よりお礼申し上げます。

私からはこの場をお借りしまして、特に現在進めております、「千葉の国際協力」モデル事業の実施状況等について、お話をさせていただきます。

皆様御承知のとおり、これまで我が国では、ODAにより主に途上国のインフラ整備を推進してまいりましたが、近年、それらの施設を適切に管理運営していくためのノウハウが強く求められており、そのような観点から、地方自治体への協力ニーズが非常に高まっております。

幸いなことに、本県内には国際協力に關して、豊富な人材・技術・資源等がございますので、本県の役割といたしましては、県の有する人材・技術等の供与はもとより、県内の企業・大学・NPO等、様々な協力主体との連携、またJICA・JBIIC等、国際レベルの国際協力援助機関等との連携を図ることが重要であると考えております。

人材として真っ先に思い浮かぶのが、JICAシニアボランティアや青年海外協力隊員として、専門技術を有し、途上国等において御活躍された経験をお持ちの皆様です。皆様の技術や御経験を、是非とも本県の国際協力の推進に生かしていければと考えております。

現在本県では、国際協力に係る枠組みづくりを目的に、ベトナムを対象とした国際協力モデル活動を行っており、平成十七年度は、国際協力銀行（JBIC）とNGOとの連携のもとホーチミン市において環境教育のワークショップを開催し、昨年度は、ハノイ市において下水道及び環境教育分野での現況調査及び技術供与を目的としたワークショップを開催しました。さらに今年度からは、JICA草の根技術協力事業を活用して、下水道及び環境教育分野において、三年間にわたる協力活動を推進していくこととしております。

これ以外にも、特別支援教育分野で、本県と千葉大学・JICAの連携による協力事業も順調に進展しているところであります。今後は、このような取組と成果を、自治体による国際協力モデルとして整理・記録し、全国的に発信していきたいと考えております。そして、県内のNPO、大学、企業等県内の様々な協力主体間の相互連携をさらに促進してまいりたいと考えておりますので、皆様方の御協力をお願い申し上げます。

千葉県JICAシニアボランティアの会の益々の御発展を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

会員寄稿

パキスタンイスラム共和国・

メモワール

羽田 亨（パキスタン）



投資環境の整備を目的に二〇〇四年十月より二年間パキスタンのカラチに赴任した。

南アジアに位置する同国は、日本の約二倍の国土に一億六千万の人が暮らすイスラム国家である。一九四七年にインドから分離独立した同国は、インドからの移民と原住の多くの部族の混成であり、未だにその対立が残る。

独立時の指導者が願ひ街中のモニユメントに刻んだ Faith・Unity・Discipline の三語が空しくすら見える。国民の九五割以上は敬虔なイスラム教徒であり、一日五回と金曜礼拝日の祈りを欠かさず、ラマダンのほぼ一ヶ月は日の出から日没まで一切の物を口にせずアラへの忠誠を誓う。過激と思われるがちなモスレムであるが、穏健で助け合いの気持ち強く、二年間危険を感じた事もなく彼等と生活・仕事を共に出来たのは幸いであつた。

居住したカラチはアラビア海に面した人口千五百万の大都市で、四・六月の酷暑を除いて概ね温暖な気候に恵ま

れ、食料品も比較的豊富であり、世界一といわれるマンゴは安く美味である。パキスタンならではのビールの入手の苦勞、時々訪れる腹痛、しばしば襲ってくる真つ暗闇と発電機の騒音、そして目覚まし代わりのアザーンの響き等今は良い思い出である。又、休暇を利用して各地を旅し、カラコルム山系やアフガンに近いペシヤワール、クエッタの部族集落を訪れた事は得がたい経験であつた。



パシュトゥンの子供たちと

工業省ビジネスサポートセンター及び産業開発公社での二年を通じて、投資環境と産業振興をテーマに活動した。投資環境では、金融、IT、エネルギーに偏っている現状から物づくりの投資受け入れ促進の観点で、産業振興ではプラスチック産業の発展に絞った調査、提言を実施した。

化の影響で工業化の遅れが目立ち、巨額の対外赤字を生んでいる。歯止めのかからない人口増と物資消費の飛躍的増加とも相俟って脱途上国に向けた自助政策が待たれている。

活動にあたっては実情の把握に重きを置き、石油化学、プラスチック、金型、加工機械の企業、協会、研究機関及び工業技術開発委員会、中小企業開発局等の政府機関の協力を得た。各企業からの経営の詳細、工場見学等オープンな対応に接し、実情を多少なり理解できた事は幸いであつたし、潤沢ではない経営資源の下で改善に創意工夫をこらし、将来の夢に目を輝かせている姿には敬服を覚えた。政府の標榜している輸出立国と活力を後押しするべく国、投資家が果たすべき役割は大きい。

同国では「インシャ・アッラー」という言葉が会話の端々に聞かれる。神の助けがあればという意味のようだが諦めの声にも聞こえてしまふ。国が少しでも安定し人々が厳しい貧困から解放放たれる日の一日も近い事を祈るや切である。

モンゴル二年間のボラン

ティア生活振り返って

横田 勝徳（モンゴル）

私は、二〇〇四年十月から二年間、シニアボランティア



として首都ウランバートル市で生活した。十月は既に冬の初めであり、辺りは冬の装いで緑がほとんど見あたらない風情であつた。ウランバートル市は北緯四十五度で、サハリンの南部に相当する位置にあり、海拔も千以上あるので、階段を登ると息切れを感じた。

私の配属先は政府に直属する機関で、品質標準センター(Mongolian Agency for Standardization and Metrology)と言います。要請任務はスタッフに食料品の検査の技術移転を行うことであつた。仕事で最も困難を感じたことは、検査に必要な器具や薬品類を入手することであつた。日本では電話一本、二・三日で出来ることも、モンゴルでは三・六カ月も必要なことであつた。食品の検査を行って明らかに不適合なことは、やはり多くの危険を伴う。例えば、食品添加物の検査では、ハム類の発色剤（亜硝酸）や菓子に彩りを添える食用色素、食用油脂の酸化防止剤、果物の防カビ剤など、日本では新聞記事になるような結果が多く見られた。モンゴルでは、国民の健康を守るための食品衛生法がまだ制定されていない。食品の規格はMNS (Mongolian National Standard) で一応設定されているが、それも不完全



現地のゲルを訪問

なものであり、日常の検査もあまり実施されていないため、多くの違反食品が流通している原因となっている。モンゴルでは食品の約七割を輸入に依存している。早急に必要食品の規格を整え、同時に検査体制を整備することが肝要であり、そのような提言を行った。

モンゴルは昨年建国八百周年を迎え、昨年は「日本におけるモンゴル年」、今年は「モンゴルにおける日本年」で、このような時期に仕事、生活が出来たことが幸いであつた。

生活面では、日本に居ては味わえない体験が出来た。これがシニア海外ボランティアの一つの魅力である。その幾つかを挙げてみたい。

モンゴルには豊かな自然が残っている。特に草原の風情は言葉に言い尽くせない。ウランバートルの郊外でも草花が咲き競い、季節と共に時々告げるヤルゴイ（オキナグサ

の仲間)をはじめ、アネモネ、ユリ、ヤナギラン、エーデルワイスなどが咲き乱れる様を目の当たりに出来たことは贅沢の極みであった。

モンゴル民族は、人種的には日本人のルーツであることは良く知られている。顔かたちは一見日本人と区別しがた。また、歴史的にはロシアなどの影響から西洋的な風習に馴染んでいる。性格的には日本人とかなり異質なものを感じた。

モンゴル人の考え方を支配しているものは、やはり教育である。共産主義的な価値観が基調にあり、幼稚園時代からある価値観を絶対的なものとして教えられるので、自由にものごとを判断することが苦手なようである。それがかこれらの計画性の欠如に繋がっているものと判断している。

大学では、学生の約七割が女子学生である。男性は教育よりも仕事の手伝いが優先され進学率は低くなるようである。女性には教養を身につけてより良い仕事を探す一つの手段としている。そのためか、職場には女性従業員が多く、私の配属先でも、実質的な仕事はほとんど女性が担っている。ただ、組織の長は男性が占め、一応の体面は繕っているようである。

一面、モンゴルには固有の伝統文化がある。特に、モンゴル歌舞団のような組織があり、馬頭琴演奏やホーミーや舞踊など、モンゴルの香りや濃厚に感じさせる優れた芸

能があり、私も随分堪能することが出来た。

私の赴任は随伴家族(家内)がいたもので、いろいろな意味で助けられた。モンゴルの人達との交流の輪が広がり、特にオリガミなどの日本文化の発信に力を注ぐことが出来た。交流を通じて多くの友人が出来たことは私達の体験を豊かなものにしてくれた原動力となった。

二年間の派遣体験を通じて、私にとってモンゴルがこんな身近な存在になろうとはとても想像出来なかった。私にとり帰国後にこの体験を日本人々に語り伝えることが重い責任であるように考えている。

e-Business による コルドバ州産品の輸出振興

水野 純也 (アルゼンチン)



二〇〇五年十一月から一年間、アルゼンチンのコルドバ州生産省輸出振興機構で、e-Business

による同州産品の輸出促進というテーマで活動をしてきました。従来、海外の商売相手を見つける手段として、海外の見本市などへの参加などが推進されてきましたが、費用の面で大多数の中小企業には困難でした。そこで、同機構では、商売相手を見つける手

段として、e-Business 即ち、電子市場の利用が、経済的で、効率的な方法であると認識し、今回の要請となったのである。

着任後、いろいろ調査した結果、JETROの電子市場 TTPP の利用推進を図ることが最適と考えました。新たに電子市場を立ち上げるには、膨大な費用がかかるので、無理でした。さて、活動の結果ですが、任期終了時点で五十五社が TTPP に第一ステップである企業情報を登録し、そのうち三十四社が第二ステップの商品情報の登録まで完了しました。目標は、四十社を第二ステップまで導く予定でしたので、目標達成率八十五割で任期終了となりました。同機構では、今後も e-Business による輸出促進の継続を図りたい意向であり、後継 SV を要請しています。



プロコルドバ主催の輸出セミナー

さて、活動環境ですが、同州は、アルゼンチンのほぼ真ん中にあり、コルドバ市は、人口約百三十万人、アルゼン

チン第二の都市で、ユネスコの世界文化遺産に登録されているコルドバ大学やエスタシオと呼ばれるイエズス会士の教会区がある古都の趣が残る住みやすい町です。

街には、ほぼ一年中、木に花が咲いています。八月から十月末まで、ラパチョという木が木いっぱい豪華にピンクの花をつけます。十月から十二月末まで、ハカラランダが紫の優雅な花をつけます。一月から五月末頃まで、今度は、パロポラーチョの木がゆりのような大きな花をつけます。

コルドバの人々は afectuoso

「情愛のこもった」で、これが異郷に住む者にとって、非常に助かりました。朝オフィスに来るとあたかも十年ぶりに会ったかのように、頬をくっつけあつて挨拶をし、夕方帰る段になって、あたかも、遠い旅立ちをするかのように頬をくっつけあつて挨拶をする。これを毎日毎日繰り返す。アサド(バーベキュー)などに、およばれに行くところの家の奥さんだけでなく息子さんまでが頬をくっつけて挨拶をする(髭など生やしている)。熊にこすられた感じがする。人と人とがすぐく親密に接している。相手を知っていて知らなくとも皆気軽に Hola! ¿Que Tal? ¿Como anda? などと挨拶する。

地球の反対側にも、こういった花いっぱい環境に afectuoso な人々が住んでいることを発見できて、ハッピーな気分が活動してくることが

できました。

映画の世界のような 国王の葬儀百日間

後藤敏行 (トンガ王国)



要請項目は、国王庁トンガ伝統文化委員会での「古文書整理」でしたが、内容は歴史的資料のデジタル保存・データベース化でした。

しかし、オフィスに行ったから、コンピュータどころか机、電話もありませんでした。まずは机を用意してもらい、待つても来ない電話は、電話線を買ってきて自分で隣の部屋から分枝して二十引張ってきました。次にコンピュータショップで見積もりを取り、コンピュータ、データ読み取り機等を発注し、大幅に遅れた納期のあと、トンガ王国はサウスパシフィック唯一の王国で、ニュージージランドの北、フィジーの東にある、世界で最初に二十一世紀を迎えた国です。

赴任した二〇〇五年四月からこの四月に帰国するまでの二年間に、トンガにとって歴史的なことがいろいろありました。五十四日間に亘る初の公務員ストライキ、王族系貴族(クイーン甥)の相次ぐ

逝去、数十年ぶりの大地震、王位継承権第三位のプリンスツィペレハケ・プリンセスカイマナゴ夫妻のアメリカ訪問中での交通事故死、市街地中心街の大部分を消失したトング史上初の大暴動（二〇〇六年十一月）、そして、そのきっかけとなったギネスブックに世界一重たい国王と掲載されているツポウ四世の崩御（二〇〇六年九月）……



前国王ツポウ4世の国葬

国王庁スタッフとして王宮行事・儀式のほとんどに関与しており、王族系貴族の葬儀では国王庁の使者として生花を届けたり、プリンス&プリンセスご夫妻の王族葬では、前国王最後の王宮儀式のカイフオノ（儀式長）を勤めたりしました。そして、ツポウ四世の大葬では、王宮内での記帳受付係、また、記録係として百日間に亘り数千枚の記録写真を撮影してきました。

列のように国民が沿道に伏して百台以上の関連車両の出迎え風景、突貫工事の国葬準備風景、省庁ごとの連夜のお通夜、国葬当日二百名の力持ちに担がれる国王の棺、葬儀に参列された日本の皇太子殿下、三十名の貴族に毎日三貴族ずつ割り振られた一日四回のハアモ（貢ぎ物届け儀式）、女性王族へアーカットセレモニー、新皇太子就任式、四十余年ぶりの大規模なカバセレモニー、新国王行幸、百日間の墓守などなど、浮世離れした大規模な伝統儀式を連日見ることができました。また、国王の病状が悪化してからは、国葬準備会議にも出席しており、準備の裏方も知ることができました。

トンガにも民主化の流れは確実にきており、今回のような大規模な大葬も最後かなと思いつつシャッターを押していました。不幸な出来事もありましたが、心優しい本場に親切な人たちが、それがトンガの人たちだと思っていいます。△感謝△

ドウマンとノープロブレムの世界と日本人
酒井 國彦（チュニジア）

定年後のある日に一本の電話が入った。
「JICAのSVとしてチュニジアに行きませんか……」という内容でした。「SVとは何か、何をしに行



くのですか」と聞く私。妻に話すとヨーロッパに近いから私も行くわと乗り気で不安な気持ちで半分の私に比べて暢気な妻でした。

しかし以前から一度は海外で生活してみたいなと漠然と考えていた私達にとつては、これは面白いなと思い取り組み始めた。

バルドー印刷に到着した。四月十二日から人口抑制の為の啓蒙活動の為に印刷物を引き受けているバルドー印刷に通勤した、毎日がカルチャーショックの連続で楽しかった。

任務は印刷技術の向上と売り上げアップでしたが、現場は思った以上に低いレベルの職業倫理感で全ての部門に改善が必要な事が理解できた。以前はもっとひどくパソコンの電源をコンセントごと抜くとかは普通に有ったらしい。毎日がトラブルの連続でディレクター室は毎日怒鳴り声が響き渡り、大変な所に来たと感じた。彼らは。怒ると怖い顔ですが笑うととても可愛いらしい顔でした。気を取り直して現場での「現在の印刷物の品質」と、以前の印刷物の品質から「過去の印刷物の品質」の表を作成し分析した。

注意してもノープロブレムと言われ聞く耳を持たず、何回も言うドウマンと言う言葉が返ってきて改善しようと



ディレクターと共に現場への説明

しない事が一番の問題点であり、国民性として理解できなかった。二つ目はディレクターが組織運営上で重要なポイントに居るチーフに仕事の管理をさせない事だ。

アナログの仕事で三十年育ったチーフ達は業務が理解できず邪魔になる状況だ。私のフランス語力では対処出来ないので通訳を月一で会議用に利用する事にした。

三十通のレポートを提出し二十五回の会議を行った。レポートの翻訳と会議、顧客との間の製作指示書、工程管理表、印刷機械の定期点検表と夫々のマニュアルの作成をディレクターと共同でした。日本人だけで作成しても時間は短く成るが、押し付けと感じさせる。

業務改善の前にある基本的な問題
安全管理、フィルム上のパズンくず、かたづけ、紙の倉庫管理（雨漏りしている）、印刷の原価管理、タイムレコー



**太平洋の癒しの島
ミクロネシア連邦**
宮崎 征士（ミクロネシア連邦）

観光
一年で五百万人が来るという観光の国はハンニバルで有名で世界遺産が七つも有りカルタージュ、シデブサイド、ドウツガ、塩湖、砂漠のラクダ、チュニジアアンブルは美しく見えます。

ダーは新品が直ぐに壊され、セキュリティは本人が夜中に盗みを働き首になり、電話が二ヶ月停止、給料が何ヶ月も停止はこの国では何時もの事だ。

日本の奄美大島とほぼ同じ面積の連邦国家で人口は約十一万弱、グアムより飛行機で二、三時間南下したところに文化、言語も違うヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエの四州で構成されています。中央政府の所在地ポンペイ島の経済省での二年間の任務は観光開発促進、一言で言えば「どうしたらもっと多くの観光客に来てもらえるか」を政府の担当官に助言し実現可能なことを行動に移すことでした。

シミア連邦は太平洋の赤道の直上位置し面積は約七百平方キロ、

今、連邦政府は真の経済的自立のため観光以外に農業と水産の三つを国の基幹産業として育成発展させる努力をしています。結果が直ぐには表れにくい観光では予算不足



ナンマドール遺跡探訪

ミクロネシア連邦のように特別の産業が無い開発途上国での観光開発促進は観光関連産業の活性化、雇用などで経済効果へ大きく貢献します。本格的な観光開発に手が付けられていない為に豊かな自然は残り、青い海、満点の星空、直ぐそこに見える虹などは日本の都会では簡単には遭遇できません。なによりも癒されるのは人々の親日感情です。日本が統治していた関係で昔の日本の光景を思い出し郷愁にかられることが多々あります。私たちが既に忘れてしまった童謡を口ずさんだり、また子供達が私たちが昔そうであったように手作りの紙飛行機や玩具(ゴム飛びなど)で遊んでいる姿はタイムカプセルで半世紀前に戻ったような気分になります。

などで前途は容易ではありません。日本からの訪問者を伸ばす為にはまずは知名度向上と観光情報の提供です。地域としてのミクロネシアは知られていても独立国としてのミクロネシア連邦の存在さえ知らない人が大部分です。日本国内には観光情報源もほとんどなかったのですが、現在は在日大使館内に観光専門のデスクが設置されプロモーション活動が始まっています。もう一つの観光開発政策は従来の観光素材をダイビングに頼りすぎているのを、もう一つの観光素材を見つけてプロモーションすることです。この結論としては観光開発促進で大きなプラス要因である治安、衛生、抜群の親日感情の良さ等を考慮し日本の「シニア熟年層」を目標と定めました。南国の花々や果樹、サンゴと色とりどりの熱帯魚の海中などの自然はシニア層のみならず癒しを求めている旅行者には必ず受け入れられるものと思っています。

またODAでポンペイ島の道路建設が実施され現在はポンペイ国際空港の滑走路延長が計画中です。これらの空港改良が実現すると日本や世界からの観光客は飛躍的に拡大すると期待されます。その時でもミクロネシア連邦の人々の宝である美しい自然が決して損なわれることがないような観光開発が継続され安定的な「癒しのデスティネーション」となることを望んでいます。

会員動静

新会員紹介

平成十九年一月以降の新会員をご紹介します。(敬称略・入会順)

丸山弘 マレーシア

職業訓練 君津市

水野純也 アルゼンチン

e-Business 白井市

後藤敏行 トンガ

文書整理 千葉市

宮崎征士 ミクロネシア

観光一般 流山市

鈴木岳 フィジー・ブータン

都市計画・建築施工千葉市

浅見洋 パラグアイ

農産加工 市川市

飯島麻夫 パプアニューギニア

情報・広報 八千代市

加藤真理 ブラジル

日本語教育 市川市

酒井國彦 チュニジア

印刷業務改善 千葉市

藤田正三 アルゼンチン

貿易(輸出振興) 松戸市

加藤真理 ブラジル

日本語教育 市川市

退会者紹介

平成十九年一月以降の退会者は次の各氏です。(敬称略)

伊藤英彦、貝沼憲男、木村亮彦、高谷俊平、田辺光宏、森充

ご在会中のご協力有難うございました。

再赴任中会員

平成十九年九月現在の再赴任者は次の各氏です。(敬称略)

浦山和良(マラウイ)、及川淳一(ポリビア)、柏尾英彦(サモア)、木内良郎(メキシコ)、北垣勝之(ヨルダン)、小松秀世(ポリビア)、菅井啓祐(ドミニカ)、高木利公(タイ)、寺島得司(フィジー)、寺田博義(タイ)、豊永俊之(チュニジア)、濱崎丘(アルゼンチン)、福井凱雄(マラウイ)

ご活躍を祈念いたします。

役員人事

今回の総会で平成十九年度役員として次の諸氏が選出されました。

会長 品川洋之助

副会長 梅谷陽子 鎌ヶ谷市

「総務」 大網白里町

副会長 黒田昭太郎 柏市

「広報」

幹事 上田義晴 千葉市

「事務局長」

幹事 山本茂穂 千葉市

「広報」

幹事 後藤優 千葉市

「会計」

幹事 増田定雄 千葉市

「小委員会」 千葉市

監査 横田勝徳(新任)

「会計監査」 千葉市

退任 泉岡輝元氏

なお、「」内は総会後役員会で決定された坦務です。

派遣地域別懇親会

パラグアイ・コスタリカ 元派遣者懇親会

八月二十五日現地JICA事務所の元調整員佐野勇一氏夫妻を囲み、元派遣者が新浦安駅前「やるき茶屋」で懇親を行ないました。



写真提供 毛利 修氏

アジア各国 元派遣者懇親会

八月三十一日昼 海浜幕張駅前の「土間・土間」で懇親会が行なわれました。総勢十五名が集まり、旧交を温めました。



写真提供 堀端俊雄氏

千葉市支部活動報告

「千葉市国際交流・国際協力助成事業に参画」

千葉市支部長 上田義晴

当会千葉市支部では、当会ボランティア活動の拡大のため千葉市国際交流協会の「国際交流・国際協力に係わる助成金交付」制度を利用、新事業に取組むことに致しました。

事業名

- ① シニア世代の海外ボランティア（定年・子育て後の生き・生きライフ）啓蒙活動
- ② 在住外国人への日本語指導、コミュニケーション補助、生活相談等の出張サービス事業

実施期間

七月一日至十二月三十一日

助成対象経費
十万円

助成対象額 五万円

長期的には収支ゼロバランスが目標ですが、助成対象額が対象経費の五十割のため、当面参加会員が経費の大半を負担することになります。

海外ボランティア啓蒙活動
としては、十月十三日（土）
に当会会員の活動・生活体験
談、千葉大学 吉田雅巳教授と
山浦衛市議会議員の特別講
演を通じて、「定年・子育て後
の生き生きライフ」を啓蒙する
講演会を開催します。

活援助サービスに関しては、言語や生活習慣に戸惑っている千葉市在住の外国人に、出張サービスをボランティアで行おうというものです。このサービスの潜在需要は多いと思われる、千葉市在住の一般会員のご協力の下に推進を考えております。

当会活動の方向としては、JICAの海外技術移転への協力と千葉県、県内各市町村でのボランティア活動を車の両輪と考えており、上記新事業もこうした発想に基づいていることをご理解戴き、ご支援を賜りますようお願い致します。

ボランティア活動報告

「浦安市市民会議の一委員として」 中川安隆

(浦安市、ヨルダン)

当SVニュース第五号にてご案内して頂いた浦安市市民会議委員としてのボランティア活動は昨年八月から開始し、約一カ年が経過しました。この投稿の八月前半までに合計十六回の月例会議、中間報告会、臨時会議を経ていよいよ最終段階に漕ぎついています。この第七号発行予定日のすぐ後の九月二十九日が最終会合の日で、そこで提言書の最終討議を行い、成果品として市長に提言されることになっていきます。その後、詳細はインターネットで紹介される予定ですが、現在までの活動内容や中間報告会資料についてもchallenge-urayasu.jpにて今ご覧頂けますのでここで説明は省略させて頂きま

行政との協働の視点から「浦安市のまち作りに関し、基本計画に盛りこむべき内容について調査及び研究をし、市民の立場から市長に提言するもの」です。

六つの分科会があつて、その一つに「市民活動・交流分科会」があり、さらにそれが四つのグループに分かれ、私は「多様な市民交流の促進グループ」に属しています。このグループの検討課題に「国際交流の推進」が入っています。

浦安市では六月現在、住民総数十五万八千七百七十人中、外国人在住者数が三千三百三十一人で、その比率は二割に達しています。我々は、基本的には、「外国人在住者もまず浦安市民だ」の立場をとり、一般市民として区別することなく「多様な市民」のカテゴリーに入れて討議を重ねています。姉妹都市問題、国際センターの機能充実など俎上に載せて討議中です。テーマに沿って自由に討議を展開していますが、与えられた討議時間はあつという間に過ぎて終う程、毎回、熱心な討議が時間切れまで続いています。

「放送大学」中南米文化研究
同好会」での活動」

齊藤富貴子
(千葉市、ブラジル)

設立準備段階では、国際理解を深めるということで、IICA・シニアボランティアとして活動したブラジルでの経験や、夫（健）のニカラグアでの体験談を中心に講話を行ってきました。当初十名から、約半年で会員十四名になりました。

毎月の活動内容はポスターにし、募集も同時に行っています。また、特別講演の折には東京、神奈川、埼玉など近隣の学習センターへもポスターを掲載し、さらに質の高い会員と同好の士を集めたいと思っています。



ました。今年は五月からブラジルでの八角堂完成のためボランティアで参加している夫から毎月ブラジル便りが届きます。七月はブラジル料理を味わいに表参道へ出しました。以上、ご紹介いたしましたように会員の食欲・意欲は尽きることがなく、「今が青春」をモットーに心身ともに健康を目標に活動しています。



の主な活動内容
「日系移住地親善交流の旅」を企画し三名の参加し



第三回帰国報告会

七月十四日(土)午前九時半より千葉市国際交流プラザにおいてJICAと当会の共催で第三回千葉県JICAシニア海外ボランティア帰国報告会が行われました。昨秋と今春帰国の七名のシニアボランティアより任国での活動体験、異文化遭遇体験などについて報告がなされました。



藤田正三氏の発表

一般市民、帰国ボランティア、当会会員など約四十名が参加し、熱心な報告と活発な質疑応答がなされました。参加者からは映像が綺麗で分かり易い、発表時間がやや少ない、もっとこのような機会が望ましい、などの声が寄せられました。

報告者は次の各氏でした。
羽田亨氏(パキスタン／投資環境／柏市)

水野純也氏(アルゼンチン／Business／白井市)

飯島麻夫氏(パプアニューギニア／銀行管理システム・コンピュータ技術／八千代市)

後藤敏行氏(トンガ／文化資料整理／千葉市)

酒井国彦氏(チュニジア／印刷機械／千葉市)

藤田正三氏(アルゼンチン／輸出振興／松戸市)

宮崎征士氏(ミクロネシア連邦／観光開発／流山市)

会員活動紹介

JICAシニア海外・日系社会ボランティア募集「体験談&説明会」に協力参加



船橋会場 パネルディスカッション

JOCA(青年海外協力協会)主催の平成十九年度春募集説明会が船橋市と千葉市で開催され協力参加しました。

船橋会場

四月十五日(日) 十時半〜十二時半 船橋市中央公民館
パネリスト 白鳥貞夫・黒須英典両会員。よろず相談員 加藤哲男・井川雅子両会員。役員は品川会長と黒田副会長が参加しました。

千葉会場

四月二十二日(日) 十時半〜十二時半 幕張メッセ
パネリスト 竹花晃・津田正臣両会員。よろず相談員 横田勝徳・内山初枝両会員。役員は上田事務局長が参加しました。

「第二回JICAボランティア経験者による協力隊まつりに出展参加」

JOCA主催の協力隊まつりが四月二十一日(土)、四月二十二日(日)にJICA地球ひろばにて開催されました。当会はJOCV千葉OB会と同一のブースで活動状況を紹介しました。



当会とJOCV千葉の共同ブース

参加者は上村実、白鳥貞夫、堀端俊夫、齋藤富貴子、影山洵、竹花晃、岡本美佐子の各会員と品川、梅谷、黒田、後藤、増田、上田の各役員でした。

「グローバルフェスタ Chiba」に出展参加



当会ブースの国際理解クイズ回答者

八月二十六日(日)千葉大学、ちば国際コンベンションビュロー、JICA、日本ユニセフ協会千葉支部の共催により開催されました。当会も多数の会員の協力のもと、ブース出展を行い、国際理解クイズなどで多くの来場者から好評を博しました。

開会式にはJICA地球ひろば草野所長が来場され、JICAブースにて当会参加者と懇談されました。

当会からの出席者は竹野恒之、津田正臣、羽田亨、中島敏雄の各会員と役員でした。

CCB便り



国際協力、という何となく難しい気がしてしまいましたが、他の国はどうなっているかな?と考えることが国際協力の第一歩ではないかと思えます。千葉県の皆様がまず一歩、そしてその先へ進んで行くお手伝いが出来れば嬉しいです。どうぞよろしく願います。(木野本まゆみ)

編集後記

シニア海外ボランティアは「体験の積極的な社会還元」(第五号大塚氏)、「帰国後が本番」(第六号金子氏)(第七号品川氏)とボランティアOBの地域活動に大きな期待が寄せられています。今後とも、地域と連携した、より幅の広い活動をご紹介できるよう、一層のご協力をお願い致します。(黒田昭太郎)

本紙へのご意見、ちば出前講座のお問い合わせは下記にお願いします。

千葉県JICAシニアボランティアの会
(The Association of JICA Senior Volunteers in Chiba)
04-7131-5830(黒田)

千葉県国際協力推進員
043-297-0245(木野本)
jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp